

あるがままの占いの教え

古代中国の運命学の伝統と叡智

阿藤 大昇著

目次

- | | |
|----------|-------------------|
| 1. はじめに | 五術の重要性を説く |
| 2. 五術の伝統 | 命・ト・相・医・山の五つの術 |
| 3. 占いの種類 | 命（三典）とト（三式）と相（風水） |
| 4. 占いの伝統 | 占いの歴史的背景 |
| 5. ロジック編 | 時間軸の見解と解釈 |
| 6. 未来予測編 | どのように未来予測するのか |
| 7. 運気開運編 | 運命の戦略と戦術と設計 |
| 8. 運命解脱編 | 運命の放鬆と変容と解脱 |
| あしがき | 運命の本質と変容と解脱の道 |
| 参考文献 | 五術の原典と参考資料 |

1. はじめに 五術の重要性を説く

五術とは、人間の運命や未来を予測し、宇宙サイクルと地球サイクルと個人サイクルの三つが交わる運命というべき存在の接点を調和することですべての人々を幸福と成功に導く普遍的な法則なのである。この原初のサイクルを表記したものが奇門遁甲と呼ばれる古代中国では「無から有を産み出す無上の宝」なのである。

五術は、古代中国の伝統が産み出した、命・ト・相・医・山の五つの術法を述べたものであり、そのルーツは中国明代の初代宰相の劉伯温からであるとされている。

命術は、人の運命を語り人生の筋書きを知って自分の運命的可能性と器の本質を悟ることである。命とはあるがままの境地（原初の境地）を指し示し、あるがままの境地にとどまり続けることを説いている。

ト術は、人や物事との縁（関係）を観ていってそれと対治和合する方法を論じる。トとはこれからどのようになるべきか、或いはどのようになれるを説く。しかし、本性は為すべきことなどなにもない。なぜならすべてはあるがまままで完成しているからだ。

相術は、命・トの結果を相で知り、その結果を相でもって理想状態に戻すことである。相とは今置かれた状態を検討して相によって修正できるものはあるがままの状態に戻して問題や災難を小さくし、少なくすることだ。

医術は、身体の健康に関するトラブルを医によって養生・治療することである。医とは病気の根本原因はどこにあるのかをブッタの説いた無明（マリクバ）から生じる無知・怒り・貪りの3つの煩惱に対応して、その対処方法を説く。苦しみの根本の原因を根絶やしにして、精神的にも肉体的にも、つまり、身口意のレベルで放鬆する必要がある。そして医の到達点は修行に耐えうる健全な身体を獲得することにある。

山術は、身体の健康と心の健やかさを山によって獲得することである。山とは悟りの境地である光明（リクバ）とどのように取り組んで行くかを説き、二元的な見解を乗り越えながらあるがままに無努力に因果を超えて行くことである。その修行の成果は夢の中でも確認することができるようになる。もちろん到達点はブッタそのものに帰すことだ。

この五つの術法によって人生の花となる健康と長寿が得られ、人生の果実となる幸福と富貴と修行の完成が誰もが必ず得られるのである。そのために筆者は五術占い師となつてすべてのひとに五術を説く。

2008年1月19日 大寒 阿藤 大昇

2. 五術の伝統 命・ト・相・医・山の五つの術と六大課

五術は、中国の伝統文化のエッセンスのエッセンスをまとめたものであり、あらゆる世代や人種を超えた人間の人生経験における国家的・社会的・家庭的・個人的な生き方や教訓が凝縮したものである。このエッセンスのエッセンスを 5 つのマトリックスに分けたものが五術というものである。運命という言葉は、中国の歴史の中で大きな働きがあるとみられており、宋易の大家である邵康節は次のように述べている。「観物とは、目で観るものではなく、心で観るものだ。また、心でみるのではなく理（法）で観るものだ。万物にはすべて理（法）があり、性があり、命がある。理は極めてこそ知ることができる。性は尽くしてこそ知ることができ、命というのは終わってから知ることができものである。」とある。つまり、運命というものは、人生という荒波を生き抜くという経験によって始めて決定し知り得ることができるものである。そういった経験のデータストックを五術では「命術」といい、運命学ともいうのである。子平・紫薇・七政といった命術ある。

ト術は、亀の甲羅を焼いて甲羅が割れる兆しを看て家の大事の吉凶を占ったのがトの始まりであり、蓍（筮竹）を使って占ったのが原始の易の占いで、このトと筮竹の二つをあわせてト筮と呼んでいる。古代中国には亀・兆・易・式の四種の占法があり、まさに今その瞬間に起きた物事や方位現象を伴った出来事を解釈するために生み出された占いである。ト術には、雑占（占ト）と選ト（方位）と局ト（測局）の三種類があり、ト易と三式（太乙・遁甲・六壬）を主に用いている。

相術は、風水が代表的なものであり、墓相、家相、人相、手相、名相（姓名）、印相（印章）をみる占いがある。相術は物体を観察することから出発しており、大きくは人間が生活する環境や地域の山地・平地・丘陵地・河川や道路が人間に与える運勢をみている。一般には、人相・手相や名前と印鑑のデザインを論じる場合がある。

医術は、中医に属するもので、湯液（漢方）と鍼灸が代表的なもので、その源流は『四部医典』に遡るといえる。事実その内容は中医と非常に接近しており、いわばルーツであるといって良いだろう。『四部医典』は五術の医の三部門である方劑・鍼灸・靈治をすべて包括し、人生における健康・長寿と幸福・富貴・修行の完成を『四部医典』は最終テーマとしている。医とは病気を治したり病気をしないように予防することであり、医療と養生を指している。

山術の山とは心と体のことであり、主に心の安らぎを目的とし、人を人生最高の境地に導き、五術では、一般に道教の功法が用いられ、これを別名修山ともいう。

以上を五術六課といってすべての現象をケース別に区分けしていく方法を取っており、これは類型的記号論というものによっている。六課という分類法は、論理体系による分類法であり、これを論理体系別といい一般的には「六大課」といい、見方によって分類する方法である。

五術とは、何がその目的に適しているかという戦略を論じるもので、それを得るための手段が何が適しているのかという戦術を論じたのが六大課であり、目的達成の手段を論じるのである。

六大課とは、

三式

六壬 六壬課式 (720 課式)

遁甲 奇門遁式 (1080 局)

太乙 太乙統式 (陰陽 72 局)

三典

河洛 (易数) 河洛は『河図』『洛書』のことで、易卦と易数 (象数易) がある。

子平 干支 (60 甲子)

演禽 28 宿と七政と 36 禽

がある。

- ・六壬は、占トと画相を占うのに優れており、天地人の人の和との和合を計る。
- ・遁甲は、方局 (方位) 中の時局と印相を占うのに優れており、天地人の地の利との合一を計る。
- ・太乙は、測局を占うのに優れており、天地人の天の時との融合を計る。
- ・河洛は、易卦を用いたト易や易数の数に属する紫薇斗数によって運命解釈を行い、本人の五福や才能がどの方面にあるのかを占う。主に天地人の人の和との和合をみる。
- ・子平は、八字の命式と大運の五音から本人の器の質量と成功する時期を占う。主に天地人の天の時との折り合いをみる。
- ・演禽は、七政と 28 宿から本人が大地に置かれた運命的条件のいわゆる人生の看板ともいえる代表的事項を占う。主に天地人の地の利との関連をみる。

三典に関しては膨大な占いの種類があり、筆者が紹介したのは、その中でも最も代表的な占いである。三典の特徴は占う素材になにも手を加えないで占うことであり、八字や易卦・易数、太陽・太陰・五星といったものをベースに占うので全体から個を占う方法である。それゆえ出た答えを変更することができない。つまり、三典の運命学は運命は決まっているという印象を人に与えてしまうのだ。これに対して三式の運命学は、個から全体にに向かっていく方法なので、個人の多様性は無限であるため、三典の要素に全く現れない運命的特性を占う事が可能であり、ある意味で三典では考えられないような違った設定をした運命を実現することが可能である。三式は作盤というものを行うのが特徴であり、そういった意味では、紫薇は三式系の運命学といって良いだろう。つまり、三典は天を現し、三

式は人を現し、風水は地を現す。その三者の交わる点こそ我々の存在そのものだ。

子平と七政とをあわせることを星平会海といい、より運命的な事項を特定することができる。六壬命理と七政命理をあわせると主体と 12 宮の関係によって、深い運命観察が可能になる。子平と奇門遁甲をあわせると普遍的な運命と個人的な運命の到達点が見えるので、両者のずれを修正していくことが天地人と融合する最も早道であり、その調和法として三式・三典・風水があるのである。つまり、その到達点とは『四部医典』が説くように健康・長寿と幸福・富貴・修行の完成である。

3. 占いの種類

三典と三式と風水

古代中国の占いの伝統的なものは、当時の国家機関に採用されていたものが多く、以下のようにまとめられる。

三典（ト易・子平・七政）

三式（太乙・六壬・遁甲）、紫薇

風水（墓相・家相・人相と手相、名前・印章）

の三者が占いの大きな体系である。

三典は、典籍を指し、運命学の教典群を集めたものである。三典はまた三命とも呼ばれており、三典の代表的なものは、「子平」と呼ばれる宋代の徐大昇の「子平三命通變」からはじまる推命術である。運命学は一般に推命術と呼ばれる場合が多く、運命を推測していく方法を持っている。ト易はト易、子平は子平、七政には七政の三者の方法があり、皆異なる時間軸とその時間を現す記号を基に運命としか言えないような情報を導き出すのである。その方法には、純然たる原則と規則があり、その見解に正しく従っていかなければ正しい回答にたどり着けないのだ。ここで重大なポイントとなるのは、その導き出された情報をあくまで現在置かれている個人の絶対的の主体を測るためのデータとして用いることだ。そのために三命に属する占いは、まず人生における絶対的の主体を決定してから、その主体に関連するものとの関係を明らかにすることで運命というものを判断していくのである。人生の多様性を概念化して13タイプに分類することで、主体から観た運命的な各側面に直接アプローチする方法が用いられている。主に個人を主体とした家族、配偶者、子孫といった関係の調和から社会における地位・財産・名声の調和を看ていくのである。

三式は、トと呼ばれる古代中国の易や占トの伝統に属する占いであり、一般には運勢学と呼ばれるものである。運命学の場合は個人に主体を置いて判断するのに対して、運勢学は、主体と客体といった対象化されたものが、主体に与える影響に比重を置いて運命を判断するのである。ゆえに三式や易を運命学の推命術と用いると主体の他に対象化された客体の運命を詳しく見ることができる。この対象化されたものが、一対一、一対多、一対群というようになった場合に六壬・遁甲・太乙といった三者の占いによって対応するのである。この対象物が人である場合もあるし、物事や方位の場合がある。つまり、ここではじめて個人と対象物の相性の善し悪しを占い論じる必要がある。三式や易のほとんどは、刹那的に瞬時に起きたものごとに対応していくことを目的としており、実態のない不確定要素が孕んだ現実に対応する占いである。つまり、対人、対家庭、対会社、対社会との調和をはかる方法が三式であったのである。紫薇は運命を現す12宮の善し悪しに対してそれを個人

の自由意志によって選ぶことができる。たとえば配偶宮の悪さを出さないようにタイプの反するパートナーを選ぶ方法が説かれている。特に子平・七政の運勢が良いひとは紫薇の吉の12宮の部分が運命として強調され、反対に運勢が悪い場合は凶の12宮の部分が運命として顕現するようである。

風水は、すでに対象物として主体が保持して所有する物、つまり、物体として成り立ったものが主体に与える影響を判断するのである。命もトも形を成さない意識的な側面に比重を置いているのに対して、風水学は、その人が所有している物やこれから所有する物によって運命を判断していくのである。占いの風水の段階を古代中国の伝統では相と呼び、相の段階では、すべての現実が決定され確定していくことになる。特に家相と配偶者との関係は個人の運命にとって最も影響が大きく、名前は、その人がその名前を使用した一時期に作用し、印鑑は印を押した一事のみに作用し、人相は個人の一生の運勢に作用する。命・ト・相の結果は、今置かれている現在の個人の情報は、すべて人相に現れると断言しても誤りではない。これは人の天然的な影響を判断したものであり、医術と山術は、人に人為的な影響を与えるが、医術は、まさに人の人相と手相を看て日常的な病気の治療を行うが医術によって運命を変容することはできない。しかし、山術によって運命の変容行為を行った人は、命・ト・相の範疇を超えた人間的存在となるようであり、運命学が導き出す人間の死期を乗り越えてしまうので、このような存在を古代中国の伝統では、仙人といったようである。この仙人への到達点として不老長寿が説かれたけれども、その方法に地丹・人丹・天丹といった三種の方法があり、主に仙道では精・気・神を三宝といい、精の精力、気の元気、神の意念を強化する方法が説かれている。特に小周天といった瞑想法によって気を体全体に巡らして採薬というものを煉って自分の病気を治したり、他人の病気を治すことができるようになる。そして小周天から大周天、丹光法といった段階に到って完全な不老長寿が完成する。しかし、このとき、そのエネルギー源をどこから導くかで、同じ小周天であっても違いが出てくる。大地のエッセンスからエネルギー得る方法と人から気をもたらす方法と天からもらう方法がある。天には、大地や人間の持っている気というものはなく、太陽の光に似た心の光をエネルギー源としている。この光あるいは光明と呼ばれるものは、宗教的伝統や精神世界で多く唱えられているが、ボン教やゾクチェンの伝統の中に具体的な導入方法があり、中国唐代には「打京推背」という光の導入方法が国家レベルで行われていたようである。これは中国でも代表的な予言書の『推背図』がそれを現したものである。古代中国の伝統では、天・地・人の三者やすべての存在の五大元素（地・水・火・風・空）と完全融合したとき、すべてのものとの調和が可能になるとしている。

4. 占いの伝統 占いの歴史的背景

奇門遁甲が初めて日本史上に登場するのは『日本書紀（推古天皇）』によると推古天皇の時代に百済から暦、天文、地理、遁甲、方術書が僧勸勒によって伝来したとされており、このとき既に太一、遁甲と共に六壬式占も日本に伝えられた。太一、遁甲、六壬の三つ占いを三式占とって古代中国の国家が初めて採用した占術であった。

天を占う、太乙

地を占う、遁甲

人を占う、六壬

と呼ばれていた。

古代中国の学問大系は「四部」という、

經部 經典

史部 歴史

子部 諸子百家

集部 文芸、技術、雑学書

の四つの大きな学問体系があるが、中国の占いは、子部の「術数家」や集部の技術書の類に分けられていた。術数は、星相・卜筮・堪輿の三つに分かれている。

中国唐代の史料の『大唐六典（太常寺卷第十四）』は、占いに関する機関や当時の占いに対する詳しい記述が残っており、『大唐六典』には「太卜署」という機関が占いを行っており、國や家に動きが出たときに龜・兆・易・式の四種の占法を用いて判断していたようである。

「龜」は、龜の甲羅を焼いてその割れ方で判断する方法

「兆」は、天体の星や流星の兆しを見て判断する方法

「易」は、人間の生活様式をモデル化して判断する方法

「式」は、宇宙と地球と人間の関係をモデル化した暦から仮想的な計算式でみる方法

龜の占いは、一種の儀礼的かつ原始的な占いであり、フーチやダウジングに近いものであったと考えられる。

兆の占いは、天体の目立った天体の現象が大きく国家や民衆に影響を与えるので、この現

象から時勢を読み解こうとした原始の測局の占法の始まりといえるだろう。

易は、日本でもおなじみの占いであり、易は、八卦という相撲でも勝負の掛け声に「八卦良い」というように一般に使われる言葉であるが、

乾（けん）は、先祖や神を祀る廟

震（しん）は、長老の男性

巽（そん）は、長老の女性

坎（かん）は、中間層の男性

離（り）は、中間層の女性

兌（だ）は、少女

艮（ごん）は、少年

坤（こん）は、田宅（田畑と家宅）

というように八卦は、古代中国人の一族の生活様式がそのまま記号化したものだ。

空間と時間の関係には方位とい現象があるが、方位は、この八卦を9つの魔方陣（宋学の『洛書』）に振ることで解釈している。この八方位は、360度を均等に45度で割ったものであり、『黄帝宅経』によると家相を見ると八方位をさらに三等分した二十四山方位というものを、三等分（15度）した艮の丑と寅に夾まれる艮が鬼門と呼ばれるている。古代の「六壬式盤」というものには、鬼門の方位が書かれていて、日本の鬼門や裏鬼門のルーツでもあり、この魔方陣のロジックの発想から産まれたものといってよい。そして、その方位を計る方法は、北極星の位置や磁石が用いられている。

中国の文字文化は、甲骨文字、金石文字が古代の原始宗教的な文字であると考えられており、古代中国の秦の始皇帝の法治国家から篆刻文字、漢字が生まれ、これは政治文字とも言われている。易は金石文字文化の産物であり、現代一般に占いに用いられている易の解釈は、金石文字で書かれた周易の内容と異なっている。これは、現代の研究で、原始の金石文字の周易が最近読まれるようになったからで、だからといって金石文字で書かれた周易が必ずしも正しいとは言えない。占いは、存在を証明するデータとして用いる為、世代別の価値観の違いは必ずあるので、もし判断に周易を用いる場合は、初期バージョンと発展バージョンとの比較を行って置く必要がある。

篆刻文字は、印章や姓名学に用いられる文字で、奇門遁甲姓名学は、この篆刻文字を集大成した『康熙字典』の画数によって計算したり、発音しないと奇門遁甲システムとリンクしない。例えば、日本で非常に多い名前の佐藤さんや加藤さんの「藤」という文字は草冠の六画を数え、「藤」の右下の「水」は『康熙字典』では「糸」の字体で同じ意味になる場合もある。つまり、『康熙字典』派の姓名学は、一文字一文字を正確に辞書で調べないと当時のデータと一致しないのである。

この最後に記された「式」は、日本では、式占といい、易の後に成立した占いであるよう

だ。当時の式占は、雷公式、太一式、六壬式をまとめて三式と称していたが、宋代には、雷公式に代わり、太乙式、遁甲式、六壬式で三式というように改められた。雷公式、太一式は、国家を占うテーマの占術であったので私蔵を禁じ一般には六壬が多く用いられた。これは六壬式の占うテーマが一般大衆の人事関係の事柄を占題にしていた為である。

太一の式盤は、1977年に中国の安徽省阜陽県の前漢汝陰侯墓から「太一九宮盤」「六壬盤」「円儀」の三つの儀器が出土されており、当時の太一は『隋書経籍志（五行部）』に記載された『太一九宮式經』がある。また『五行大義』の中にも記述が残されており、『太乙金鏡式經十卷（唐王希明撰）』は、唐時代の太乙を伝える一般の資料である。

太乙は本来、天を占うものと地を占う太乙があったようだ。天占の太乙は、円形の天を表す式盤を造り、地占の太乙は、都天太乙とも呼ばれ、大地を表す四角形の魔方陣の式盤を作成する。これは中国大陸の洛陽（黄土）という古代の都を中心にして九つに分けたもので、太一雷公式九宮法とも呼ばれている。つまり、雷公式は遁甲式を指すものであり、後の奇門遁甲に発展して呼び方が改められたようである。太乙はその地方によって太一や太乙と呼ばれている。

唐代には既に諸葛純の『諸葛武侯奇門遁甲全書』が存在しており、宋代に新しく編纂された『景祐遁甲符應經（宋仁宗製、明抄本）』は、現代に遁甲を伝える原典であった。

太一九宮式の変遷

漢代	占的	唐代		宋元明代
太一九宮	天占	太乙式	→	太乙神数
	地占	雷公式	→	奇門遁甲

奇門遁甲は、

年単位は、国家の情報

月単位は、上流階級の情報

日単位は、一般階級の情報

時単位は、天変地異の情報

のそれぞれ四つのパーツを作成してそれぞれの時間単位を基に占いを展開してる。奇門遁甲は、この四つの情報に八方位を加えることで、それぞれのローカル情報を引き出す。つまり、国家から個人における方位現象を解明するロジックを発明したのである。

六壬は、天を表す円形と地を表す四角の式盤が合体したもので、この頃の六壬は、現在と同じように四課三伝と十二天将というものを振って 9 つのテーマを占題にしていたようである。

- 一に曰く、嫁娶 縁談占
- 二に曰く、生産 出産占
- 三に曰く、暦注 選吉占（出行占、日取りと吉方位を取る占い）
- 四に曰く、屋宅 家宅占（風水の陽宅）
- 五に曰く、禄命 身命占（運命占）
- 六に曰く、拝官 求官占（出世占）
- 七に曰く、祀祭 願望占（祈願、祈祷）
- 八に曰く、発病 疾病占（宿曜病医占）
- 九に曰く、殯葬 埋葬占（風水の陰宅）

このように縁談、出産、日取り、家宅、運命、出世、祭り、病気、葬式を占う等の日常的なイベントを占っている。現代は多様化して時代が変わってはいるが、このような占いのテーマは、現代でも普遍性があり、不変のテーマで、このように占いとは、人間の生活習慣に根ざしたものであると言える。

『大唐六典（太常寺卷第十四）』には、前章で述べた亀・兆・易・式は、卜占に関する記述であるが、「禄命之義六」による運命判断の記述も残されている。

- 一に曰く、禄 出世を占う
- 二に曰く、命 運命を占う
- 三に曰く、馭馬 遷移を占う
- 四に曰く、納音 五音から運命を占う
- 五に曰く、並何 不明
- 六に曰く、月之宿 二十八宿（占星術）

以上が運命学の元となった占いのようである。

この時の占うテーマは現代と同じように出世や自分の運命がどのようなものであったかを占っている。さらに馭馬という外出運を論じたり、納音は、生年干支を五音に変換して運命を占う方法や二十八宿で男女の相性をみるものであった。

ちょうど唐代は、六壬を推命に用いて運命を判断していたり、現代のように生年月日で占う『李虚中命書』と呼ばれる文献も現代に残されている。しかし、この頃の『禄命書』の

特徴は、年柱を主体に運命判断していたようで、つまり、個人情報を用いながらも社会である年柱を中心にしたオールロジックの理論を採用しているが、これがやがて宋代になると徐大昇の『子平三命通變』のように生まれた時間というローカル情報をさらに加え生年月日時の干支を八つ並べて四柱を立てて、さらに社会の年柱を主体にするのではなく、個人を代表する生まれた日柱を主体に運命を占うようになった。つまり、ローカルのロジックを採用した「禄命法」が誕生したようである。このときの四柱推命は、「格局」の内外を求めることで文武（現代では公私のこと）の何れかに向くか、或いは科挙に受かるか等をテーマに運命が論じられていたようである。そしてこれが現代に伝わるを四柱推命のルーツであったのである。

「馱馬」は現代の四柱推命の中でも「神殺」として扱われ、もし馱馬が四柱の中にあれば人生の変動が多くあるとか、馱馬の運に入ると引っ越しや転勤が多いというような判断を行っている。

「納音」は、生年月日の干支を納音に変換して運命を占っていたようで、干支の音を五音という五行に対応した音に変換して五行の組み合わせによって運命を論じている。

「月之宿」は、二十八宿のことで、生まれた時間の月の位置で運命をみていたようである。つまり、生まれ日の月が在住する二十八宿の方位で運命を占っている。これは後、七政という中国占星術の中で用いられるようになるが、二十八宿は中国古代より主に季節を計算する為に用いられていたが、月のある方向の二十八宿の位置で運命が割り出せると古代中国はみたようである。七政では、太陽、太陰、木星、火星、土星、金星、水星の総てに実星のある方位の二十八宿の位置を求めて運命判断しており、これは唐代の『張果老星宗』で論じられている。

子平、紫薇、七政は、中国暦や中国占星術の影響を多大に受けて完成していったようであり、そのデータストックは『書目（当時の図書目録）』の文献を参照しても数え切れないほど膨大な情報量であった。子平は中国国家の科挙制度とともに発展し、紫薇は民間の占いとして広まり、七政は国家の占星術の情報が一般に流出したようである。漢代の頃の占星術は、国家をテーマに占いを行っていたが、七政より個人をテーマに運命を解釈している。つまり、ローカルの情報を占う啓蒙活動が盛んに行われていたようである。

5. ロジック編

時間軸の見解と解釈

古代中国の宇宙観と時間を表す記号として干支が用いられ、そして空間を表すには、易が用いられ、方位は干支と易を併せて表現しようとした。

太乙という占いは、その起源を古の黄帝元年の甲子年を起点に干支暦を作成したようあり、最初は1年、10年、12年、60年、180年、360年と数えていくうちに天文学的に膨大な暦数処理するために暦における統一理論を考えた。つまりそれが、太乙で用いる暦だった。

この暦の最大のサイクルから並べてみると次のようになる。

1 皇は、	12 極	4665 万 6000 年間
1 極は、	30 元	388 万 8000 年間
1 元は、	12 会	12 万 8000 年間
1 会は、	30 運	1 万 0800 年間
1 運は、	12 世	360 年間 (奇門遁甲で用いる時間サイクル)
1 世は、	30 年	30 年間
1 年は、	12 ヶ月	
1 月は、	30 日	
1 日は、	12 時	(現在の 24 時間)
1 時は、	30 分	(現在の 2 時間 = 120 分)
1 分は、	12 秒	(現在の 4 分 = 240 秒)
1 秒は、	現在の 20 秒	

このように最大と最小の時間単位は、最大の時間単位を 12 と 30 の数によって交互に割っていったものであり、現在の時間にシフトして計算していくと 2008 年の立春は、次のようになる。

皇は、	甲子 (紀元前 1015 万 3917 年～紀元前 626 万 5918 年迄)
極は、	丙寅 (紀元前 237 万 7917 年～151 万 0083 年迄)
元は、	壬子 (12 万 9600 年間)
会は、	丙午 (紀元前 1917 年～8883 年迄)
運は、	甲戌 (1684 年～2043 年迄)
世は、	甲戌 (1984 年～2013 年迄)
年は、	戊子 (2008 年)
月は、	戊寅 (2008 年 2 月)
日は、	己未 (2008 年 2 月 4 日)

時は、 乙丑（2008年2月4日2時43分、立春、旧正月節）

宋易の皇極経世の最大のサイクルが12万9600年であるが太乙は、紀元前1015万3917年を起点としているのである。

皇極経世は、

一世が30年

一運が360年 一運は12世

一会が10800年 一会は30運

一元が129600年 一元は12会

のサイクルで、主に元会運世の時間単位を用いる紫薇測局、運世年月を用いる子平測局や皇極経世の月卦と日干と時支を用いるト易推命がある。

年単位は、古来より冬至説と立春説があるが、三式占術の太乙・遁甲・六壬は、皆、冬至夏至の二至の24節気の中気の月将を基点として宇宙のサイクルを占うのに対して、三典の子平・ト易や紫薇は、立春の節を基点としている。つまり、地球のサイクルを占う場合は、必ず立春のいわば24節気の節を基点とした月単位によって一年の基点を決めた方がより我々の状況を解釈できると古代中国人は考えたようだ。

* * * * *

風水は、地球環境の地形の形状エネルギーを読み取ることで、その土地で生活する人々の運勢を占うシステムである。諸葛孔明の時代には、既に奇門遁甲による風水解釈が存在していたようであり、風水は別名「神降ろしの法」であるといっても良いかも知れない。なぜそういえるのかというと風水は、宇宙より、神童や仙人になるような逸材を産み出すために行われる一種の儀式であったようだ。『都天撼龍經（九宮入福救貧生仙産聖）』という奇門遁甲風水の書物によると国家や一族の貧を救う方法として聖人や仙人をその風水の土地に降ろすテクニックであったのである。国家や一族が貧困に喘ぐのは、優れた指導者で清い政治を行う諸葛孔明のようなリーダーを国家の宰相に採用しなければならなかったのである。このような人物を聖人といい、仙とは、優れた技術をもつ才能を極めたエンジニアや研究者といっても良いかも知れない。国家の経済を安定させるには、優れた学者や研究者が顕れて、既存のシステムを改良改善して効率をアップすることで、国家経済をも安定させる必要があったのである。このように見ていくと風水というものは、古代の学校であり、古代の経済学の純粋な姿であったともいえる。

* * * * *

周易は、周王朝がこれからどうやったら発展するか、維持できるか等の教訓が書かれたものであり、時代が下るにつれて経典から思想書にそして占いの書に発展した。

ト易とは、易をトに用いて個人的なテーマを占う為に民間において発達したものだ。一般に断易と呼ばれるもので、日本でも盛んに行われている。断易は一時一占といってテーマを決めて占うとき必ず、一回につき一事の物事を占うルールがあり、同じ内容をすぐに占うことを禁止している。これは占いそのものが汚れて正しい判断ができなくなるという見解から出発している。しかし、六壬や太乙占トなどの時間を占う場合は、違う占法を用いて判断することが可能であり、断易で出た答えを他の占いから導き出した多角的なデータと比較検討して物事や運勢をより深く掘り下げて現実を観察していくことが可能となる。これがまさに五術六大課の叡智といえるだろう。ト易では、断を断易で行い、解釈には易経を用いるというユニークな方法が用いられているのである。

* * * * *

明代の太乙は、九宮の八方位をさらに二等分（22.5度）した16方位を用いており、その中宮と16宮に太乙、計神、天目客目（文昌、始撃）、四将（主大、主小、客大、客小）、三基（君基、臣基、民基）、五福、等を振って判断している。陰遁、陽遁の各72局の太乙統式で、年、月、日、時の盤の作成している。

年盤は、天下の時勢をみる。

月盤は、一国の時勢をみる。

日盤は、一家の運勢をみる。

時盤は、一個人の運勢や天変地異をみる。

時盤は、また太乙命理盤を作成して運命を判断することができる。太乙命理は、八字の年、月、日、時の情報から太歳、月建、日辰、合神や定計という星を加え、命宮と身宮を含めた12宮で判断を行う。太乙命理は、運命を設計し戦略し、自分の能力にあった人生のステージをみていく。そしてどの社会階層に適しているか判断することができる。

命宮は、当人の性格と才能をみる。つまり、命宮は心理的なものをみる。

身宮は、素質と体質をみる。つまり、身宮は生理的なものをみる。

兄弟宮は、兄弟姉妹、友達、交際関係をみる。結婚以前の異性もみる。

夫妻宮は、夫婦関係で自分に対して一番係わりの深い異性をみる。（正配）

子女宮は、子供、目下をみる。結婚以後の異性もみる。

財帛宮は、法律に基づいた正しい収入をみる。
田宅宮は、法律に基づいた正しい財産をみる。
官禄宮は、自分の能力によって得られた地位をみる。男女共に玉の輿に乗る才能をみる。
奴僕宮は、部下や使用人との関係をみる。
疾厄宮は、病気や事故をみる。
福德宮は、人生の幸せ、楽しみ、寿命をみる。
相貌母は、人に与えるイメージをみる。
父母宮は、父母や目上との関係をみる。
遷移宮は、出生地からみた仕事方位をみる。(引っ越しや仕事に用いた方位)

筆者の友人に生まれた地点より北を現す子の方位の父母宮に太乙星があるひとが、“その方位に君を抜擢してくれるボスがいるよ”と筆者がアドバイスしたところ数日後にまさしく北の子の方位に住んでいた彼の知人のある会社の会長に抜擢された。彼はしばらく身の振り先を思い悩んでいたがそののち社長のポストを任されるようになった。その後すぐにその会長は亡くなったそうだ。太乙の方位とは、吉祥を生む方位で、古代中国では洛陽に都をおいていたので太乙の中宮からみた 16 方位の太乙の方位に妃を嫁がせていたようだ。逆に都入りするひとは生まれた地点より見た太乙の方位に都がなければ出世は難しかったようだ。

* * * * *

六壬には、次の三つの占いシステムがある。

大六壬＝オールロジック	方位を論じない六壬
小六壬＝オールロジック	方位を論じない六壬
六壬神課金口訣＝ローカルロジック	方位を論じる六壬

大小六壬は、基本的に占う必要性が生じたときを触機（占う基準の時間）とするが、『大六壬神課金口訣（上海図書館蔵）』では占う人のローカル情報の方位を加えることで、より触機を明確にしており、つまり、より現実的な既成事実の情報を加えた方が、よりリアルに現実を判断出来ると古代中国人はみた。しかし『金口訣』は五術の体系からみるとかなり異端な学説であるといえる。このように三式に属する占いは皆、基本的にローカル情報の方位を加えて判断している。断易は、漠然とした個人情報しか引き出すことができないが、六壬は彼我の主客の関係が明確に出せるのが特徴であり、太乙は個人と群れの関係、遁甲は個人と複数の関係から選ぶべき重大事項が現れるようである。

大六壬は、縁談、出産、試験、売買、病医、家出、出行等の一般の人事関係が占うテーマ

であり、六壬が最も得意とする占題である。参考書として『六壬演課断三伝』がある。

小六壬は、当てものの占いを重視した六壬であり、話の始まりや物事の兆しを占う。

『大六壬神課金口訣』は、占う人がいつどこから来たかが触機となるが、太乙、遁甲はいまからどこに赴くが触機となり、主動と客動で価値観が異なり、故に奇門遁甲のように最良の方位を優先する必要があるのだ。中国古代の占いは、現代の占いとは非常に異なり、精妙で緻密なものであった。そして日本の祭りや宗教的な儀式儀礼のように非常に厳粛で厳かな行事をおこなう為のひとつの伝統であったようだ。

六壬は個人のローカル情報を抽出することにとっても優れた占いであり、六壬命理、六壬方位、六壬家相といったより個人を中心として五術を展開する方法がある。

* * * * *

奇門遁甲は、魔方陣を基本理論に用いており、奇門遁甲では、気学と同じように九星の紫白を振っていく。これを遁甲九宮という。そして遁甲とは、甲が遯れると書き、三奇六儀を導き出し、天地、星門、宮神の六建（六龍）と呼ばれる六つの情報を魔方陣にふって一年の冬至、夏至を二時間毎に分けた時間の八方位を占う奇門遁式は、全部で1080局のパターンがある。この二時間毎に奇門遁甲盤を作成する方法には「山」と「奇門扱時の法」と呼ばれる二種の方法があると『太乙紫微靈臺九總八卦造宅三白都天撼龍經』に書かれている。

山の時盤は、五日一局のサイクルで作盤をする方法で、動土という増築や改築の着手する時間と方位を選ぶ時に用い、土を動かす場合は必ず土の日（丑、辰、未、戌日）に行っていた。

奇門扱時の法は、十時一局のサイクルで作盤をする方法で、出発時間、営業する時間、帰還する時間の三つの時間の方位を選んでいった。そして風水や山盤が良い人は、四旺の日（子、卯、午、酉日）を選び、まだブレイクしていない人は、四生の日（寅、巳、申、亥日）を選んでいった。

つまり、風水に用いる山盤と移動用の方位に用いる奇門扱時の法の使い分けがなされていたのである。

奇門遁甲は厳密には、運、世、年、月、日、時の時間帯ごとに奇門遁式を作成するが、各盤ごとに意味があり、次のような用途であった。

運盤は、建都に用いられた。また皇帝の墳墓の建設にも用いられた。

世盤は、一般に風水の陰宅、陽宅に用いられていた。大きくは、都市や宮殿の建設にも用いられた。太乙は、世の単位の一族の引っ越しの方位に用いた。

年盤は、時間単位が長いので、国家の状態を判断する。『御定奇門寶鑑六卷』には、九宮も年単位でその年の国家と国家を揺るがす天変地異が起きるかを論じている。そしてこのときだけは、遁甲九宮の紫白を「九星」と呼んでいる。

月盤は、主に増築、改築や引っ越しを判断する。

日盤は、個人の旅行や出張の方位を判断する。

時盤は、個人のあらゆるイベントに用いる方位を判断する。

故に奇門遁甲は、個人に最もメリットを与える方位を選択する方位学となったようである。そして明代では『太乙統宗遁甲』という書もあり、太乙も広義では遁甲の一部であったようだ。

奇門遁甲は、諸葛孔明の子孫が残した文献が現在尤も最古のテキストであると考えられる。そのテキストの内容が後世に流伝したが、次の四つの文献が奇門遁甲の主要テキストであると考えられる。

『諸葛武侯奇門遁甲全書（諸葛純撰、清抄本）』

『景祐遁甲符應經（宋仁宗製、明抄本）』

『奇門遁甲秘笈大全（劉基撰、明刊本）』

『太乙紫微靈臺秘典九總八卦造宅三白都天撼龍經（作者不明、清抄本）』

奇門遁甲の正式名称は、『都天撼龍經』のテキストに「都天太乙」とか「太乙雷公式九宮法」とあり、『唐史（芸文志）』や『大唐六典』に記載されている雷公式、太一式、六壬式の三式占の雷公式は奇門遁甲のことであったようだ。『宋史（芸文志）』には太乙式、遁甲式、六壬式というように改められている。

『景祐遁甲符應經』は、古くは隋朝の葛洪撰の『三元經』、湯氏、王璋氏等の遁甲諸説が引用されて宋代の時、新たに遁甲の經典として再編集されている。

『奇門遁甲秘笈大全』によると奇門遁甲（正確には奇門遁甲風水）は、「選宅三白之法」という家相術から奇門遁甲風水に発展したと書かれている。その原文には「…是書謂之選宅三白之法、出都天撼龍經八十一論。太乙、紫微、九總、八卦者、天地之骨髓、星斗之神機。…」と書かれているが、実際は『太乙紫微靈臺秘典九總八卦造宅三白都天撼龍經』の『都天太乙總論』の中で展開されているのが『都天撼龍經八十一論』であり、明代初代の宰相だった劉基をルーツとする五術門派の礎を築いたものであった。門派とは占術の家元のようなもので、命、卜、相、医、山の五つの術を駆使していたので五術家とも呼ばれている。そして『都天太乙總論』の中には、九つの重要書物の出典が明らかにされており、奇門遁甲風水の奥義が書かれていたのだ。

『太乙紫微靈臺九總八卦造宅三白都天撼龍經』という書物は、『景祐遁甲符應經』の理論を引用し、検討しながら奇門遁甲風水の經典を作り上げたものであった。『奇門遁甲秘笈大全』の一編の「遁甲神機賦」は、この書籍を引用したものであが、実際は「都天太乙總論」というタイトルの中で記されている『都天撼龍經八十一論』というのは、『太乙紫微靈臺九

『都天八卦造宅都天撼龍經』の根本理論の総論であり、引用されている九つ書物は各論であったようだ。

都天太乙とは大地を太乙で占ったものであり、遁甲を指すもので、撼龍經は風水の經典のことである。つまり、『都天撼龍經』とは奇門遁甲風水を論じた經典のことであったのだ。

- 其一日、都天八九卦
- 其二日、入地三元
- 其三日、行兵三奇
- 其四日、造宅三白
- 其五日、遁形太白之書
- 其六日、入山撼龍之訣
- 其七日、轉山移水九字玄經
- 其八日、建國安邦萬年金鏡
- 其九日蓋為、玄宮入福救貧生仙產聖

『都天撼龍經』の『撼龍經』は唐代の風水書に出典があるが、正式名称は『都天太乙』の『撼龍經』であるので、この九つの書物は一般の風水を論じたものではなく、奇門遁甲のロジックによった風水と家相の判断方法が書かれていたのだ。家相については特に壮大なスケールの内容が書かれており、中国の紫禁城の様な宮殿やその周辺の都市を設計する方法から一般庶民の家宅の設計方法に及んで書かれている。

『諸葛武侯奇門遁甲全書』は、すでに唐王朝に採用されていたが、その流れが宋代の趙平章撰の『烟波釣叟歌（『鬼谷三元經』とも呼ばれている）』に受け継がれようだ。この二書の奇門遁甲のテーマは完全に戦争の為のマニュアルであり、遁甲式を作成する「演式（数奇門）」の段階から危険に対応するまじないとしての道教的作法（術奇門）の方法が説かれている。『烟波釣叟歌』は十時一局の時間ロジックを使った奇門遁甲が論じているが、『都天太乙総論』の中には山と呼ばれる五日一局の時間ロジックを使って風水でも適用可能な奇門遁甲の方法が論じられている。そしてオールロジック化の第一歩である「奇門四十局」が出典されており、風水思想の解釈が多く反映されている。この「奇門四十局」の運用の所に「奇門択時之法」という時間を選択する方法が説かれている。つまり、当時の奇門遁甲は極めてローカル的なロジックであったが、『奇門遁甲秘笈大全』に至っては、すべての方位現象を解釈する為の占いとしてオールロジック化に向い、普遍的な奇門遁甲システムに発展していったようだ。つまり、占いとは、オールロジック化してより完成に向かった普遍的真理を著したものなのだ。故に宗教的なものは、ある一部の世界で開かれたローカルな真理であり、占いは総ての一般に通じる普遍的真理を追求して、それを世に開いたものであったのだ。

* * * * *

子平推命は、干支暦の生年、月、日、時の4つの時間単位の60甲子を四柱の八個字に置き換え、60甲子が織りなす、五行の強度、格局のスタイル、60甲子の吉凶、四柱と運勢の60甲子のバランスを論じてブレイクするときを予測してしまう学問である。この方式はまったく中国の麻雀と同じ発想がこの子平システムに採用されているようだ。

子平は、唐代の『李虚中命書』や『禄命書』の出現で、干支暦の生年月日より運命を論じる啓蒙運動が行われており、六壬によって禄命が既に行われていたので、それが四柱の八字の解釈に用いられ元朝の李欽が『淵源子平』を残し、それが明代の『淵海子平』に受け継がれたようだ。唐宋の子平の詩集を編纂したのが、明代の萬民英の『三命通会』という書であり、子平のルーツは宋代の徐大昇の『子平三命通變』や徐子平の『明通賦』より始まったと考えられる。そしてこの子平こそオールロジック化に成功した子平推命だったのだ。

明代の建国の宰相の劉基は、奇門遁甲の原理をベースに新しいオールロジックの子平推命を発明し『三命奇談滴天髓』という当時の最先端の子平推命が誕生した。その影響を受けた雷明鳴の『子平管見』や神峰通考の『命理正宗』の古典な子平と革新的な子平が混在したのが明代の子平推命の特徴であったようだ。このときに民間の秘伝的写本として『欄江網』という子平は『滴天髓』と同じレベルの子平推命を論じており、この『欄江網』は任衛範(1853年)の息子の任綏卿(白水青松)が、この原版の『欄江網』に注釈を加えて『命理索隱』の中で現代に伝えている。しかし、「命理準繩」というタイトルで発表してしまったので、その原典が『欄江網』であったことを当人はまったく知らなかったようだ。この原版に近いテキストをもとに余春台という人が『窮通宝鑑』という書を残したが、実はこれが原版の『欄江網』を全面的に書き換えており、原典の原文がこの書によって後世にまったく伝えられなかったようである。更にこの『窮通宝鑑』から『造化元鑰』という別バージョンの『窮通宝鑑』が書かれたが、まったく原典の内容とは違った方向に進んでしまったようだ。皮肉なことに以上の『窮通宝鑑』『造化元鑰』の二書を秘本として日中の研究者は、評価してしまったが為に徐楽吾を始めとする近代中国と日本の子平推命は原典の意図とまったく違う子平推命になってしまったようだ。一般に子平推命が難解なのはテキストの多くが本当の子平推命を論じたものが非常に少ないがゆえに子平推命を独学でマスターすることが非常に困難であることだ。ほとんどが、劉基が発明した『滴天髓』のレベルの子平推命による運命解釈を行える占い師さんは、筆者も含めて全体の数%に過ぎないようだ。

子平には格局と用神と体神といった見方があり、それぞれが三種三様のロジックがある。一般の四柱推命と異なるところは、命というものをひとつに縛ることにあり、そのひとつの

運命の要点を一瞬にして読み取ることができる。そして成功する時期とどのような規模でどうした成功なのかをみることができる。たとえば楽をした成功なのかそれとも非常に苦労が伴う成功なのか？その永続性は？そもそも成功できるのか？というような清濁（成敗）・真仮（久暫）・順悖（苦楽）といったカテゴリーで運命を看て行くのである。

* * * * *

紫薇は、作成した命盤の 12 宮をランキングした占いであり、何が自分の運命にとってベスト 1 か或いはワースト 1 かを判断する占いである。また運勢においてもランキングできることが他の占術と比べて紫薇の独自性であると想われる。それを踏まえた上で、12 宮の象意を求めていったら良いのではないだろうか。そして占術の象意は、他の占術と同じように吉凶における傾向やタイプが表示されるようである。

命宮は、当人の性格や容姿をみるところで、貴賤という出世するかどうかをみる。

身宮は、一生の重大事項をみる。例えば何を生き甲斐にするのか等をみる。

兄弟宮は、兄弟や友人との関係、つまり、和合をみる。

夫妻宮は、配偶者との関係や配偶者のタイプをみる。

子女宮は、子供との関係をみる。

財帛宮は、売買能力、経営能力をみる。事業家や商人に向くかどうかをみる。

疾厄宮は、病気、災難をみる。運動能力を見る所で、競技選手の適可をみる。

遷移宮は、異郷運や海外運をみる。対人関係運や貿易業に向くかどうかをみる。

奴僕宮は、目下、部下の関係をみる。教導（先生）に適しているかどうかをみる。

官禄宮は、勤めや奉仕業務に向くか否かをみる。官僚になるにはこの宮の良さが必要。

田宅宮は、家柄をみる。田宅宮では、動不動産の有無を判断できない。

福德宮は、家庭運や人生の幸福度をみる。昔は寿命もこの宮でみていた。

父母宮は、両親や上司との関係をみる。

諸葛亮孔明の紫薇命盤は、兄弟宮が飛び抜けて一番良く、諸葛孔明の命式の兄弟宮は、午に紫薇があり、命宮に左右がある。つまり、兄弟や友人によって大出世することを意味している。孔明は赤壁の戦いのとき呉の宰相である魯肅の友人の兄の諸葛瑾の紹介で孫権に抜擢され大活躍してブレイクして最後は蜀の丞相まで出世し、兄の諸葛瑾は呉の大將軍になっている。この事実をみると兄弟宮の紫薇の象意は兄弟にとっては出世や富貴栄華と取れる。そして本人にとっては兄や友人の抜擢で、皇帝の補佐をするという、人生の中でこの個人の最高能力と重大事項が紫薇命盤から読み取れる。

中国で有名な西太后の紫薇命盤は、命宮が一番良く、紫薇に左右が合うので皇帝皇后や大出世する運命を持っていると判断できる。西太后は、子の紫薇命宮で、父母宮に左右があ

り、西太后は無名の時、同姓同名の女性に間違えられて官吏からお金を受け取って王宮に入り出世したと伝えられている。勿論飛び抜けた目上運の良さによる出世であった。つまり、紫薇命盤での六親の象意は、飛び抜けてよい命盤の象意を 12 宮に置き換えて象意を求めていき、運命に大きな影響を与える六親宮、成敗宮、福德宮との関連をリンクさせて見ていく（修密的）と『紫薇心得』のレベルを超えてしまう判断が可能である。このように占術というものは、発想によってその秘伝のシフトアップが可能な世界であり、より現実を究明するツールへと進化して行くべきである。

紫薇の運勢判断には、ある門派の写本に、左輔、右弼を流月に飛ばして判断するところがあるが、それが当たるか当たらないかは、浮き雲の如しと判断している。紫薇で用いる月運の判断の斗君を使用するとき、月運宮の紫薇や天府と流月左右が同宮したときは、もしかしたら的中するかもしれない。勿論その歳の運勢が紫薇ランキングのベスト 1, ワースト 1 であった方が確実だと想われる。この方法を理解した上での四化星の運用であるならば、適中するかもしれない。しかし、『紫薇大法』の中での四化星の優先順位は、大変低く命盤の解釈にすら論じていないのである。

* * * * *

七政は、中国占星術をルーツとするが、風水思想を大幅に取り入れた為に西洋占星術やインド占星術とはまた異なったロジックを持つに至った。その決定的な違いは、西洋占星術やインド占星術は、究極のローカルロジックの占いであるのに対して七政は、人類史上初めてオールロジック化した占星術だったのである。七政は子平と同じように誕生時間が月のサイクルの 2 時間単位の範囲で運命が推移して行くとみている。ちなみにインド占星術は太乙と同じような宇宙を中心とした時間ロジック（サイドリアル）を採用しており、西洋と中国の占星術は地球を中心とした時間ロジック（トロピカル）を採用している。七政で扱う 12 宮は、西洋占星術のように天球にある 12 宮ではなく、いわば地球上に立つ自分を中心に 12 方位を均等に排した 12 の宮殿の建造物から七政と呼ぶ、太陽、太陰、木星、火星、土星、金星、水星といった五行思想に貫かれた実星解釈と 12 宮と七政や七政と七政との合、会、刑、沖の 4 つの関係から運命を割り出していく。そして二十八宿は、七政の在住する方位から割り出し、その七政の象意の個人差を明確にするロジックとして用いられている。そういった意味では従来の占星術の概念を打ち破る大幅な進化と言わざるを得ない。日本人を判断するのに、なぜローカルロジックの西洋占星術やインド占星術に頼る必要があるのか。お隣の中国でオールロジック化に成功した風水占星術を使った方がより実用的であるといえるだろう。七政は、密教思想を受けた中国の初めての占いであり、風水思想をより多く受けている為により現世利益的な占星術として発展したのである。そのロジックには太乙命理が大きな影響を与えたようである。

七政では命宮と身宮を太陽と太陰の位置と生時から求めるが、これは風水の家相盤で求め

る門と玄関の位置を重要視する情報を模したものであるいえる。

七政で扱う十三宮の判断は次のようになる。

命宮は、一個人を代表する容貌、才能、性格を表し、ビックに成るかをみる。

身宮は、一個人を代表する生理、健康、潜在能力を表し、人生を代表するスタイルや看板をみる。

財帛は、一個人を代表する金銭及び経営能力をみる。

兄弟は、一個人を代表する兄弟姉妹及び競争能力をみる。

田宅は、一個人を代表する財産及び蓄財能力をみる。

子女は、一個人を代表する子供及び異性関係をみる。

奴僕は、一個人を代表する人災及び目下の関係をみる。

夫妻は、一個人を代表する配偶及び夫婦関係をみる。

疾厄は、一個人を代表する疾病及び災難の問題をみる。

遷移は、一個人を代表する旅行及び対外関係をみる。

官禄は、一個人を代表する職業及び目上の関係をみる。

福德は、一個人を代表する享楽及び交友関係をみる。

父母は、一個人を代表する自由及び父母の関係をみる。

最近目覚しい活躍をなされている吉永小百合さんは、七政命盤の身宮に芸能を意味する金星が会しており、生まれながら芸能関係に資質があったようだ。一般の芸能関係の人でも身宮に金星が会しているは非常に稀で少ない。このように七政命理は人生を代表するものがはっきり現れるようだ。

6. 未来予測編

どのように未来予測するのか

占いの時間軸は、どのカテゴリーに属する時間単位を用いることで、それをもとに未来予測が可能となる。

時を起点とするものは、年月日時を用い、究極の個の現象をみる。また極めて個人的な相性をもとめることができる。

日を起点とするものは、年月日の誕生日を起点として個性と家族との縁や人間関係の相性をみる。そしてその情報をもとに物事が生起する日を予測することができる。

月を起点とするものは、運世年月を用い、子平測局などの国運や会社運をみることができる。

年を起点とするものは、毎年一年ごとの運勢をみることができる。

世を起点とするものは、30年単位の国運や時勢をみることができる。

運を起点とするものは、360年単位の国運や時勢をみることができる。

時を起点とする子平推命は、未来の年、月の単位が予測範囲であって日、時を判断することができない。これは運命というものを主体に判断している為である。そのほかの紫薇も月運までが限界であり、七政に関しては、天体の月の運行をみていくので、日運までの判断が可能である。トの占いは、時を起点として構築されているので、二時間単位で起こる物事に対して予測可能である。象数易の占いは、数として現れる顕現を易に戻して現象を解釈する方法を持ち、どのような方法で導き出した数や時間単位を未来予測のツールとして用いることができる。

中国の預言書は、以上の占術のテクニックが応用されており、『推背図』は、三式や象数易と測字（姓名学）といった占いが用いられているようである。『推背図』の作者は李純風と袁天綱とされている。この『推背図（複数のテキストが存在する）』の第60象の図に唐王朝が中国史上においても永く存続した秘密が隠されていたのである。国家存続には、大局を見据えた未来予測と国を治めるための秘策が必要であった。

第60象にこうある。

一金甲人 小兒推背 一人の甲冑を着た軍人の背中を子供が押す

一陰一陽 無終無始 一陽一陰 終りも無く始めも無い

終者自終 始者自始 終わる者は自ずと終り 始まる者は自ずと始まる

茫茫天数此中求 忙々天数此中求 皆因天数此中求
成敗興亡不自由 多少興亡不自由 世代興亡不自由
推背図裡誠從看 萬々千々説不尽 萬々千々説不為
天家氣運一時同 只在推背去來求 只須推背去還休

多様な天の理を此の中（推背図）に求め
国家の成敗と興亡と不自由について
万々千々の説を尽しても
ただ背を推すことにしかない

とある。『推背図』の 60 象は「打京推背」と呼ばれる呼吸法によって光明というものに導くための一種の方法を説いたであつたようだ。

子平は、大運、年運、月運を用い、大運は、命式より並べた 10 年間の運勢を干支の上下を 5 年に分けることができる。つまり、五年ごとの運勢の推移とそれに絡む毎年の年運と月運をみることができる。紫薇は、大限の 10 年間と小限の一年ごとと斗君という月運をみることができる。七政は、木星と土星の運行で年運の成敗と禍福をみて、太陽、金星、水星、火星で月運をもとめ、月の運行で日運をみる。このとき、三者の占いの運勢を照らし合わせ看することで、現在おかれた運勢とどのような現象が起きるかということを運命学の立場から未来予測するのである。つまり、命術は、個人レベルの運勢サイクルを割り出す方法を持っているということが、特徴である。これは国家の国運や会社の社会運においても同様であり、国家や会社が成立した時の運世年月を作成することで、未来予測が可能となるのである。紫薇測局においては、元会運世の時間単位を用いるので、30 年単位の運勢の推移を論じることができる。（判断は『傳本紫薇』にある）現在の 2008 年は、戊子歳で、1984～2013 年が世の甲申に当たる。

この時間単位は、皇極経世から割り出したものである。

現在の皇極経世の元会運世

元 甲子
会 庚午
運 乙亥
世 甲申

皇極経世	運卦	乙亥 (1744~2103)	天風?	中国清末~現代
皇極経世	世卦	甲申 (1984~2013)	火風鼎	
皇極経世	世卦	乙酉 (2014~2034)	火風鼎	
皇極経世	年卦	(2004~2013)	火水未済 (火風鼎の三爻変)	

皇極経世による 2004 年~2013 年の測局

本卦	火風鼎			
之卦	火水未済			
初一	子孫	宗教・社会保障		2 点
世九二	官鬼	政治・戦争・災害		-3 点
九三	妻財	経済・景気・生産		-2 点
九四	妻財	経済・景気・生産		-2 点
応六五		宗教・社会保障		1 点
上九	兄弟	人民		2 点
会建	庚午	兄弟		0 点
運辰	乙亥	官鬼		-2 点
伏神	卯	父母 天候・天災・交通		0 点

世爻は卦を代表するもので、世爻の官鬼がマイナス 2 点のためにこの 10 年間は、戦争や災害が起きたり、政治が乱れるようだ。景気や経済を現す妻財爻もマイナス 2 点で、経済においてもかなりのダメージは避けられない。そのような状況にありながら宗教方面や社会保障が充実するので人民は平穏無事となる。対治方法は火風鼎と火水未済の三爻にヒントがあり、各界や業界のトップはよく人のアドバイスを聞いて正しい判断のもとにことを為すべきだ。そしてやたら無理に対治しないことだ。

皇極経世稽覧図（国家の運勢を奇門遁甲で測局する）

乙亥運	(1744～2103)	丙奇驚門	国家の経済が不安定な状態にある。
癸未世	(1954～1983)	乙奇開門	国家の安定がみられる。
甲申世	(1984～2013)	丙奇生門	経済の繁栄がみられる。
乙酉世	(2014～2043)	丁奇生門	学問の発展がみられる。
甲申年	2004年	丙奇景門	経済の景気がよい。
乙酉年	2005年	丁奇杜門	学問の停滞や欺瞞がみられる。
丙戌年	2006年	戊儀生門	交際が頻繁になる。
丁亥年	2007年	己儀生門	芸能の繁栄がみられる。
戊子年	2008年	庚儀開門	医学の発展がみられる。
己丑年	2009年	辛儀生門	宗教の繁栄がみられる。
庚寅年	2010年	壬儀傷門	争いと災難が絶えない。
辛卯年	2011年	癸儀驚門	国家の治安が不安定になる。
壬辰年	2012年	甲尊開門	政治の打開がみられる。
癸巳年	2013年	乙奇死門	国家の安泰が窮まる。

太乙の五福は、45年サイクルに運行する。1864（甲子年）～2044（甲子年）

1864～1908	巽宮	発富	経済成長で国民が豊かになる。
1909～1953	坤宮	君寿	天子や指導者が長生きする。
1954～1998	中宮	国富	国力（経済力）が外国に比べてつよくなる。
1999～2043	乾宮	辺安	国が平和である。
2044～2088	艮宮	賢臣	政治家や官僚が有能である。

2007年の太乙神数の測局

計神は、世界的な経済を現し、大歳の意味する不動産に関係したゴタゴタや焦げ付きが起きるものの太乙に逢うため経済の発展が見込まれる。アメリカからみたとき計神太乙のある卯宮は、南欧、イラン、イラク、トルコと中国からみた卯宮の日本と韓国が世界経済のキーマンとなっている。

君基は、国威を現し、凶星に逢わないので、外交上一目置かれて国威が保てる。

臣基は、政治を現し、始撃と大歳に逢うため、政局に衝撃的なトラブルやゴタゴタが多い。

民基は、経済や民間を現し、始撃・客大に逢うため、民間レベルに衝撃的な事柄や軍事関係に関するトラブルに見舞われるものの太乙・計神・文昌に逢うため、経済的困窮は政府が確保する可能性があり、文化や学術面の発展がある。

2008年の太乙神数の測局

計神は、世界的な経済を現し、文昌の対沖に逢い文昌の意味する伝統文化や学術的なものが引き金になったり、主要国の舵取りに問題が起きて来るようだ。アメリカ（世界）からみたとき太乙のある酉宮は、中国、日本、韓国、北朝鮮と中国（アジア圏）からみた酉宮のイラン、パキスタン、アフガニスタンが世界経済のキーマンとなっている。

君基は、国威を現し、大歳凶星に逢うので、外交上に問題やゴタゴタが多く国威が保てないようだ。主小にも逢うので国威を保つために突発的な防衛手段を講じるようだ。

臣基は、政治を現し、太歳凶星に逢うため、政局は波乱やゴタゴタが絶えないようだ

民基は、経済や民間を現し、2007年と同じように始撃・客大に逢うため、民間レベルに衝撃的な事柄や軍事関係に関するトラブルが長引く。しかし、太乙・文昌に逢うため、経済的困窮は政府が対応する可能性があり、文化や学術面の発展がみられる。

天地人と五術の関連図

	曆	三典	三式	風水	医	山
天	太乙曆	子平	太乙	竜穴砂水・理気	霊治	修密
人	皇極経世	ト易	六壬・紫薇	面・掌・名・印相	鍼灸	養生
地	干支曆・旧曆	七政	遁甲・紫薇	家相・墓相	方剂	玄典

皇極経世の時間区分による占術体系

元会運世 紫薇測局

運世年月 子平測局・子平年月方位・紫薇月盤方位

年月日時 子平推命・紫薇斗数推命

日時分秒 鉄版神数

7. 運氣開運編

運命の戦略と戦術と設計

五術六大課は、類型的記号論であるためにその適性に合わない者が用いた場合、開運するどころか、もっと悪い状況を産み出す場合があるということだ。たとえば、一般公務員が奇門遁甲の吉方位を使用したとしよう。仕事の成果が上司に認められたが、上司はそれだけの実力があるのだから当人の能力以上の仕事を要求してしまったというケースである。よく芸能人が事業に着手して大失敗するケースがよく見受けられるし、また逆に一見五術を熟知していると想われる占い師が完璧な吉方位を取って開業して失敗している場合がある。これこそが五術における大きな落とし穴だといえるだろう。適材適所を無視した吉方位の開運は、むしろ利より害の方が多いことを知らなければならない。しかし、これ以前に自らの命の器を知っていなければ、五術を実際的に理解することも実際に実用することも不可能だ。なぜ五術が卜術よりも命術を前に置いているのかは、五術の最大の欠点が類型的記号論であったからだ。すなわち、よりの確に長所を指摘できたとしても、それが反対に最大の欠点になってしまうことがあるからだ。人はそれぞれの図式（ルール）を持っている。財に執着する人・地位に執着する人・名声に執着する人・宗教に執着する人・文芸に執着する人・スポーツに執着する人・健康に執着する人・ブランドに執着する人・アニメのキャラクターに執着する人・恋愛に執着する人・人気に執着する人・義侠心に執着する人……等、数えればきりが無いが、それぞれがその図式通りに生きているので、その目的を達成するのに人の迷惑や自然環境などはまったくお構いなしに突進してしまうことがある。知恵と自覚と覚醒を保っていないからだ。自分のやっていることが周りにどんな影響を与えているかを理解していないとしたら、何を知っていようが、才能があろうが、有名であろうがすべて無意味だ。それは根本的な無知だからだ。現代の諸問題はすべて理不尽な人間の図式が造り出した産物に過ぎない。そこから生じる苦しみ・困難・病気・災難・難病・貧困・不条理に対して問題はその顕現に支配されてはならないことだ。自分の本質を見失うことなく、偽ることなく、家庭や社会の人々並びに大自然に敬意を払いながら調和することの方が大切だからだ。すなわちそれが一番問題を解決する早道だからだ。だからすべてをあるがままにする必要があるのだ。

子平命理は、生まれた環境を論じることなく命式を求めるため同じような命式を比較して優劣を論じることがデータとして用いることができない。これは紫薇、七政命理でも同様である。太乙命理はどこで生まれたかが重要なテーマとなる。太乙は方位を論じる占いから出発した命理であるので、どの方位を使用するかが、開運の重要な鍵となる。遁甲命理はその人の多様性の中で一番特徴のある部分を論じ奇門 40 格によって求められるので、その運命を代表する格局が開運の鍵だ。六壬命理は、第一課の主体と第三課の客体の情報がはっきり現れるので、本人が求める主体と客体の方向性を論じることができる。究極的には理想の相性の人が誰であるかを選択できることが六壬命理の最高の開運法といえよう。

8. 運命解脱編

運命の放鬆と変容と解脱

五術の最終段階は、すべての思考で構築したすべての概念を打ち壊してしまわなければならない。すべてを打ち壊してしまわなければ、思考や概念に引き吊られ、すべてがあしかせとなって執着の呪縛から解き放つことができなくなるからだ。幻身の悟りを説く時代は、完璧に終わった。なぜなら、幻身の本当の意味を誰もが悟っていないからだ。どんな過去世や意生身を見たり感じたりできたとしても、その霊的体験に執着している限り、どのような体験であっても本人を真実の悟りの境地に導くものではない。過去世や先祖供養といった過去の遺物にしがみついてはならない。未来の光明を求めるべきだ。幻身は、常に二元的な対象次元のものなので完全な悟りとしては認められていないからだ。今こそ、ゾクチェンのテクチャーとトゥゲルとバルドの修行を成すべきだ。この修行法は自らを確実に未来において自己解脱に向かわせる道だからだ。なぜその修行が可能なのかというと「打京推背」による呼吸法によって存在の土台から常に発せられている光明のエネルギーを直接本人に導入する方法が現代において開示されたからだ。この呼吸法は各人の誕生日より算出される36通りの呼吸法があるのだ。存在の土台には、本体・自性・エネルギーの三つの側面があるが、「打京推背」はそのパイプラインともいえる光のラインを強制的に自らの光の受信機に接続する方法であるといっている。一般の修行法は、ほとんどが漸進的な段階によって日常次元から幻身を経て光明に向かう道が説かれている。幻身は仮諦（世俗諦）という相対的な真理の自己顕現としておこる現象であり、真諦（勝義諦）という究極的な真理の自己顕現が虹の身体なのである。これは仙道もゾクチェンにおいても例外ではなく、「打京推背」は頓悟的な段階によってすみやかに光明に辿り着く方法なのである。これはブッダが悟った三昧の光明を直接感じ取りその光明の中にとどまり続けることと共通している。三昧の光明の中にとどまっている限り、すべての顕現や行為は虹の身体になっていく、トゥゲルの四つの光の顕現を経験することによって執着心は浄化され自分と他を対象化するという意識が消滅する。もう二元的な見方をしなくなるので対象に支配されなくなる。すべてが独立自存では存在しないことを本当に理解できる。すべての自己顕現は心の本性の中に自然解脱していく、輪廻と涅槃がはっきりと理解できるようになる。すべては大なる転移の虹の身体の悟りを得ることができるようになる。虹の身体を構成する光子体には、カルマを記憶する土台がまったくないのだ。これに対して幻身は素粒子レベルで顕現しており、カルマを記憶し積み重ね輪廻に陥るだけだ。どのような見解も行為もすべてのカルマは虹の身体の本体である心の本性の中に解放されすべての顕現は自然解脱していく。もうどのような宗教や哲学や科学の学説に所属する必要はなくなる。もう祈りを捧げる必要すらなくなる。人が祈るのは、目の前で起きている現象を支配しコントロールしたいが為だ。これは本当の意味での祈りではない。そこには我があるし無理にことを為そうとしている。あるがままであればすべての現象はすべて善であり、すべては自然

の流れに帰す。すべては完全なものであると悟ることができる。あるがままであればあらゆる宗教行為は完全に意味を失う。なぜなら、すべてを等しく認識できるようになるからだ。すべての多様性は、心の本性の中にとけ込み浄化され自然解脱していく。もう煩悩を放棄することも、変容する必要も浄化する必要もない。すべての煩悩はブッタの知恵となり、衆生を救うすべての力となる。自らがブッタと寸分も違わぬ存在であると認識できるようなる。それこそが大いなる完成であり、すべての存在はブッタに帰していく。

あとがき 運命の本質と変容と解脱の道

五術は、古代中国の占いの伝統が生み出した人間が今の現実を強く生きるためのブツダの知恵そのものが、具現化したものであり、本来、形を持たないものが具体的な姿をもって現れたものである。なぜならば、人が人としてあるがままに生きるすべてのブツダの生きた悟りの境地を言葉や教えとして伝えようとしたものであるからだ。

占いを論じる場合には、この点を明確にする必要がある。一般の占いは、このようなブツダの知恵に基づいているのではなく、多くはある占者（編集者）によるものだ。占いである以上、ある法則を基にある現象を対象化して判断している。そのとき絶対的主体と客体・価値観・意味がうまく説明できていれば物事を見事に観察できることであろう。しかし、一般の占いには、このような深い洞察を見分けることができるロジックが用いられていないのである。たとえば、血液型・星座・生年月日が同じと運勢も同じになると結論づけているし、または各占いで導き出された断片的な知識を繋ぎ逢わせて総合的にうらなう方法が、一般のマスコミや雑誌に搭載される多くの占いに採用されている。この世の中で生起している多様な現象をこのような占いによって正しく判断することは不可能であり、その占いがたまたま当たって現実と一致したとしてもそれは概念上のお遊びになってしまうだけだ。なぜなら、そのような非常に狭い見解によって、その人やその人の運勢を論じることが、本人の多様性や可能性すらも否定してしまうことになってしまうからだ。人間の人生を4タイプ・6タイプ・9タイプ・10タイプ・12タイプ・36タイプ……というようにタイプ別の考察をどんなに積み重ねていったとしても人間の本来持つ原初の生命論や生命観を無視した概念では、どんなに科学的な根拠を挙げて証明したとしても世の人々を納得させることはできないし、そのような概念に人の人生は収まりきることはできない。しかし、国家とか社会における現象を解釈しようとするとき、これは非常に大きい単位、あるいは単純なサイクルによって見ていくことなので、むしろ一般に行われている占いのロジックは、国家や社会の動向を見ていく古代中国では「測局」と呼ばれる占いが用いる方法であるのだ。つまり、現代の一般の占いは、占い本来の正しいやり方が見失われ、乱用されていることは確かであり、占いの元を成す伝統や文化が正しく伝えられていないことや科学的な考察が施されていないことが大きな原因の一つだといえる。そして一般のそのような占いは、習得が非常に簡単であり、ものの本質を突くような占いではないことは、非常に明らかであり、安易なものの考え方によって相談に来た人々を大いに迷わす原因を作るだけだ。筆者は、ある占い学校の講師をやっていたときがあったが、そのとき、ほとんどの受講生は、伝統と格式のある占いを研究する人は少なく、安易な占いや簡単で受講費用の安く習得できる占いに頼っていた。それも占いの洋の東西を問わず、伝統的な占いは、敬遠されて誰も見向きをすることはなかった。まさに占いの乱用、混乱、混迷の時代であり、占いを正しく理解することも正しく説かれることも正しいやり方で行うこともできない状

態にある。つまり、ある部分だけを抜き取った理屈だけ小手先だけの占いが大多数であるといえる。なぜこのようになってしまったのか？なぜか、占いの伝統が残した本当の占いの心、占いの純粋な意識をみんなが歴史の中に忘れ去ってしまったことが大きな要因である。本当に占いが伝えようとしているのは、深淵な占いロジックや理論ではない。占いが伝えようとしているのは、その概念の彼方にあるものであり、言葉や理論によって伝えることは不可能なのである。まして五術占いは、ブッダの知恵であるといった通り、どんなパラドックスを用いたとしても説明不可能であり、そのパラドックスの多くの占いから導き出された情報を多角的に照らし合わせたとき、初めて運命とか運勢と呼ばれるまったく形をもたないものが、形をもって現れてくるのである。これこそが古代中国の運命学の本質であり、それを伝えようする古代中国の命・ト・相の占いは、まさに人間の存在そのものを言い現しているといっても過言ではない。

命の子平は、主体と客観から現象として顕現する運命の意味を論じる。

トの六壬は、主体と客体を明らかにして対象化される現象の顕現の意味を論じる。

相の風水は、存在事物の物体を観察して現象が顕現する意味を論じる。

この三者を解釈することで今自分の目の前で起きている物事の多様な現象の意味が本当の意味で明らかになる。

そして、トの奇門遁甲は、空間性の原基を説いたものから出発しており、我と空間との不二を論じ、様々な人生上の問題をある時間の空間との融合を説くことで、問題を自然に解決していくことができる。トのもう一つの太乙は、同じく空間の融合を論じるのだが、ある固定されたポイントにとどまることで人生に変化をもたらすことが可能である。これはおもに事業の開業や出店、移転、興入れ、家の建築などの方位に用いられるのである。まさに人生の基盤となる土台のポイントを算定するものであり、このとき初めて風水によって、竜、穴、砂、水の善い地点を選び、善い家相を設計する必要があるのだ。これによって人生における幸福と成功、つまり、吉祥のさらなる吉祥が産み出されるのだ。これ以上の占いが、いったいどこにあるといえるのだろうか。しかしこのとき重大なポイントがある。それを行うとき、純粋な心であることだ。心が浄化され成長していなければどんな問題も解決することはできないのだ。

一般の占い師は、まさに吉祥を生むものではなく、現実での可能性を、本質を否定して限界（絶望）を説く教えに過ぎないものなのである。人は様々な伝統文化や宗教、教えや風習、規範、教育、政治、法律等によってがんじがらめに限定され、本来の自分の持つ特性や本質を見誤っていたり、見失っている場合が多い。だからそれらの束縛を一つ一つ自分で振り解いていく必要がある。占いはあらゆる文化や伝統に縛られることなくその本質を学ぶことができる。つまり、占いは、文化や伝統といった概念の彼方にあるものを見届けようとしているからだ。あらゆる概念に制約されることはない。しかし、その現代の占い

が、ひとを制約する一つの原因となっているとしたら、それは本当の占いではないからだ。あらゆる偏見や欺瞞から脱却し、本来の自分、本当の自分を見届けることができる占いこそ、本当の占いであり、どれだけ自分の抱えている問題を解決・解放に向かっていけるかで、その占いの真価が決まるのである。

次にもう一つ人生に大きな影響を与えるのが、相性の問題がある。ある人とある人が組むだけで吉祥のさらなる吉祥が生みだされたり、3人組むことで、その関係から簡単に大きな利益が生じ、三者の誰も損することがまったくないのだ。そして反対に凶の相性の人と組むと、人生における不幸や災難が降って涌いたように次から次へと来るような相性があるのだ。まさに相性を知らないということは人生において最も大きな敗因だと言わざるを得ない。

占いの到達点は、みんなが幸せに暮らせていくために何もかも失わずに誰も犠牲を払わない方法を見出すことだ。運命の本質を語るには、運命の心髄を深く洞察することができる占いの伝統を用いるべきだ。しかし、現代は、この伝統を持たない占いが蔓延し、占いが本来持つ、「本質」「変容」「解脱」の三者の教えの側面がバラバラにされて、占いの教えであるものが宗教や科学といった道に分けられてしまい、別々に発展したために、本来、科学と宗教が表裏一体であった占いによる運命的生命論や世界観を見失い、単なる一般庶民の気休めや概念の限界（戯論）をうらなう占いに成り下がってしまったのが、現代の占いの正体だ。

占いの三者の側面の「本質」は運命を形造る様々な要素を解き明かし、存在の有様を説くものだ。「変容」は、開運することで、運命の軌道修正を行い、それは運勢の凶を吉に変容し、吉に吉を加えて必ず、人を幸福に導く方法だ。最後の「解脱」はすべての人の到達点に向かわせるための教えだ。自己解脱と自然解脱の2つ道があり、一つは、自力本願の教え、もう一つは、他力本願の教えがある。最終的にブッダから菩薩、観音、如来となって衆生救済を行うことができるようになる。運命の根本を変えるには、心（意識）を浄化する「洗心革命」以外にない、多くの制約や限界を生み出す二元的な見方を乗り越えない限り、果てしなく立ち現れる幻影（カルマが産み出す）に惑わされて受容と拒絶による無上の苦しみを受けるだけだ。人は、あるラベル（名前は事務的な限界概念である）のキャラクター（概念化されやすいもの）をただ演じ続けているだけだ。しかし、本質は、あるがままに演じることに意味がある。誰がどのように判断（思考）しようとも、ものの本質に達していればあるがままで完璧だ。占いはただ純粹に人を救い悟りに導くだけだ。伝えるのは占いの心（本質）であり、ラベルやキャラクターではない。人間の本質まで届かない占いをしている権威というラベルを貼った占いに意味はない。どれだけ人を救い悟りに導ける教えと叡智が残されているかだけをみればよい。様々な問題を乗り越えるための占いをすべきだ。だから一般に思考されて造られた二元論の占いでは、すぐに限界に達し行き詰まり、滅びてしまう。古代中国の占いは、人間の根本である主体／客体の不二、空間の不二、天地人の不二を説く教えなのである。そしてもちろん五術の到達点は、聖仙であり、

ブッタと不二になることだ。占いはもともと科学的側面（数理的）と宗教的側面（意味的）と原始生命論（形状的）の三者がすでに確立しており、切り離すことも分解することもできない三位一体の側面を兼ね備えているのである。人間が思考の産物として生み出した宗教や科学に収まりきることなどあり得なかったのだ。だから占いを科学的に証明することも統計学として証明することも医学として証明することもすべて無意味である。今心の底から本当に苦しんでいる人々をすぐに救済するには、科学も、学問も、宗教も、現代医学も妥当ではない、占いこそすぐさま行なわなければならない応急処置であり、最大の処方箋であり、妙薬を施すことになるのだ。そのような伝統を科学や宗教といった狭い概念で閉じこめてしまう考え方こそ避難すべきことだといえる。何百年も占いは歴史の片隅に追いやられ迫害されてきた。しかし、今、人を救済する教えとしてこれ以上のものはないということを確認し、悟ることが最高の教えであり、最速に人類を救済する道だ。それが占いの教えであり、唯一の鍵だ。そして人間の生命の根源は光明であり、すべての人々に光明は、常に遍照している。

2008年 1月19日 戊子歳 大寒 阿藤 大昇記す

参考資料 五術の原典と参考文献

透派の専門書は、以下の通りである。

- 『大法』 透派初代梅素香。基本の命式、占盤を作成し、占術としての吉凶の定義を行う。
- 『止観』 著者不明。占術の辞書の役割を持ち、吉凶の象意を一覧できる。
- 『心得』 透派十代王文澤。心眼で秘伝を会得するレベル。
- 『参禅』 透派十代王文澤。禅のレベルで悟りを得る。空性との融合を説く。
- 『修密』 透派十代王文澤。密のレベルで悟りを得る。光明との融合を説く。

『大法』に関連する著作は以下の通りである。

命術『紫薇大法』（紫薇斗数）

『子平大法』（子平推命）『子平洩天机』という書もある。

『星宗大法』（七政、中国占星術）『七政星學』張耀文著 台湾 創譯出版社

卜術『卜易大法』（断易、梅花易）『周易の真実』張耀文口授

『六壬大法』（六壬神課）透派秘伝干支六壬大法 張耀文著 香草社刊

『遁甲大法』（奇門遁甲）透派奇門大法和訳 張耀文著 鴨書店刊

『太乙大法』（太乙神数、測局、太乙命理）

相術『面掌大法』（手相、人相）子平推命を応用した手相術

『陽宅大法』（家相）陽宅遁甲圖 張耀文著 台湾 創譯出版社

『風水大法』（墓相）風水入門 張耀文／竹内一景共著 久保書店

医術『方剂大法』（漢方）方剂大法口訣 張明澄著 香草社刊

『鍼灸大法』（鍼灸）ツボの本 張明澄著 久保書店

『靈治大法』（精神療法、靈的問題を解く方法）

山術『玄典大法』（老荘思想、中国密教）密教秘伝『西遊記』張明澄著 東明社

『養生大法』（養生、導引、気功、小周天、房中術）

『修密大法』（密教的修法、呪符）

占術の原典

	唐代	宋代	元代	明代	清代
子平	『李虚中命書』	『子平三命通變』		『滴天髓』 『欄江網』	『子平真詮』
			『淵海子平』	『淵源子平』	
紫薇	『紫薇斗数全書』	『紫薇闡微録』	『紫薇星訣』		
七政	『張果老星宗』		『七政四余』	『五星集腋』	『星平会海』
卜易	『河洛真数』	『河洛理数』		『黄金策』 『増册卜易』	『卜筮正宗』
		『易卦积義』	『皇極經世書』		『梅花易』
	『皇極定数』 『先天蠱子数』		『皇極数』	『鉄版神数』	
六壬		『大六壬大占』		『六壬金鎖玉匙』 『玉闕歌』	
遁甲	『諸葛武侯奇門遁甲全書』 『元機賦』			『奇門遁甲秘笈大全』	『御定奇門寶鑑』
	『景祐遁甲符應經』			『都天撼龍經』	『奇門天地書』
太乙	『太乙金鏡式經』	『太乙淘金歌』	『太乙統宗寶鑑』	『太乙命書』	『太乙神数』
面掌				『神相全編』 『金面玉掌』	
陽宅				『黄帝宅經』 『陽宅遁甲圖』	
				『陽宅作用、気色、相形、富砂、貴砂』	
風水	『撼龍經』			『堪輿謾興』 『山竜秘旨』 『水竜秘旨』	

有名占術家の著作

唐末	陳希夷	『紫薇斗数全書』 『河洛真数』 『神相全編』
宋代	邵康節	『皇極經世書』 『梅花易』 『易卦积義』 『皇極定数』 『邵子数』 『鉄版神数』
宋代	邵伯温	『先天蠱子数』
宋代	徐大昇	『子平三命通變』 『沙條秘書』
元代	耶律楚材	『五皇秘言』 耶律純 『星命遡源』
明代	劉基	『滴天髓』 『紫薇闡微録』 『黄金策』 『奇門遁甲秘笈大全』 『皇極数』
明代	野鶴老人	『増册卜易』